

会報 川端文学研究会

二〇〇三・十一

もどかしき 不在

細谷 博

伊藤整の『変容』を読んだところである。

初老の画家の私生活、女との交わりの心理が克明に語られ、しかもそれがこの社会のただ中に在る、現実性をもったものとして迫ってくる。老いてむしろ倫理からの解放を感じつつある「私」は、より自由に奔放に生きんとし、「人生には予定外の色が色々あるものだ」、「感覚の求めるものすべてを善としたい」などと嘯く。その目は女たちの「変容」

老いを見据えつつ、なお形を変えて息づく「美」と「性」を味わいつくそうとするのだ。「好色」文学の傑作であり、「老い」の学びでもある。「愛情」と「金銭」の配慮、その「生活と意見」も示唆に富む。「芸術」についても又「私が一生に描く絵のうち、本当の仕事というのは、どの絵にもかすかに漂っている極めて小さな、些細な部分である。そして私は、その種の小さなことを、私の幾倍も、幾十倍も為し得る画家たちが存在したことを知っている。世間が、画壇がその常識として考えているのと別な極く小さなところに、真の仕事というものはあるのだ。かくの如く自分の「仕事」の「小さな」確実性を受けとめつつ、自らの「性」をも「善」として享受

できる境地とは、と羨み、かつまた「いやな臭気を放つところの、執着の強い老いたる動物」と顧みて、自己のおぞましい姿に嘆息し、「人生の真相というのは捉えられない」と咳く、「私」にも共感する。たづぷりとした読後、まさに、伊藤整の人間理解の「自在な到達点」(平野謙)が、そこにはある。

そして、わが川端文学にはそれが無いのだ。いや、それら「老い」や「性」に関してのもるもろの読み取りは読み手の側の自由である、しかし、作品自体にはそうした確かな認識、姿勢、指針といったものがどこにも見当たらず感じさせるのだ。それが、今の私にとって川端作品の魅力であり、問うに価するもどかしき 不在 である。

「この世ならぬ美」川端文学の魅力

山中 正樹

私と川端文学の出会いとは二十一年前。大学の一般教養の講義で「千羽鶴」を読んだ。担当は中世文学の美濃部重克先生。先生は、日本近代の小説を何篇か取り上げられ、時間・空間・語り・イメージ(イメージジャー)などの分析概念を用いて講義をなされた。

当時哲学科だった私には、先生の講義は新鮮で毎回の講義が楽しみだった。小説を読む

喜びも教えていただいたように思う。

その時に最も心に残った作家が、川端康成だった。それから私は、「伊豆の踊子」、「雪国」、「山の音」、「みづつみ」、「片腕」、「眠れる美女」と川端の作品を読み漁った。

川端の作品を読み進むうちに、自分の中にひとつのイメージが出来上がって来た。それは川端の描き出す作品世界は、「氷の柱の中心で幽かに燃える青白い炎」だというものだった。はなはだ抽象的な表現であり、幼い印象であることはお許し戴きたい。

その時私は、「生と死」、「美と醜」、「善と悪」、「彼岸と此岸」など、相容れぬものが同時に存在する川端文学の特質と、それゆえ現実の世界には存在しがたい川端文学の美しさを、漠然ととらえていたのだと思う。

いまさら持ち出すまでもなく、私の抱いた印象は、「雪国」の「夕景色の鏡」が描き出す、「この世ならぬ象徴の世界」に通ずるものであつたらう。いずれにせよ、十九歳の私にとって川端の作品世界は、恐ろしいほど美しく冷徹な世界であり、強烈な印象となつて、しばらく心から離れなかった。氷の中で揺らめく青白い炎が、つねに眼の前に妖しく輝いているようにも感じた。

そのイメージが後年私を、川端文学研究に向かせた。そしていまもなお、私の心の片隅には、その「青白い幽かな炎」が揺らめいているように思えてならない。

「みづづみ」に魅せられて

河野 育子

理系志望だった高校三年生の夏、母が入院し、点滴の待ち時間に読んだのが、川端康成の「みづづみ」でした。

「伊豆の踊子」の清々しさを覆す魔的な水のイメージは、明確な答えを求める理系の価値観を打ち砕くものでした。そして行間を超えて伝わる恐ろしさに惹き込まれ、百八十度進路を変更し、文学部に入学、更に大学院に進学する機会をいただきました。

そこで恩師に出会い、言葉の深い世界に導かれ、川端の初期から晩年に至る多面的な作品世界に、一層魅了されました。

そして自分なりに、川端作品の一照射を試みたいと奮戦する日々です。迷ったとき、考えにつまったときに思い出すのは、あの高三の夏の感動であり、時がたつほどに鮮やかになるそれに、改めて川端文学の底力を知りません。

同時に、川端文学を学ぶことで、多くの方々との出会いがありました。とりわけ地方に住む私にとって、川端文学研究会に入会させていただき、また今回、「会報」が発行されることは、本当に有り難いことです。

今後もこれらを励みに、微細なものの中に大いなるものを宿す川端作品に、真摯に取り組んで参りたいと思います。

私の目に映った川端文学

金 恵妍

川端康成の作品には、旅先での出来事を題材にしている作品が少なくない。有名な『伊豆の踊子』や『雪国』は、それぞれ湯ヶ島と湯沢という温泉場を背景にしている。実際に川端が伊豆を訪ねた時、旅芸人の踊子一行との出会いがあり、芸者駒子の場合も実際のモデルがいたわけである。偶然としては面白い。

もしも、川端が私の母国、韓国に生まれていたらしたら、『伊豆の踊子』や『雪国』のよくな作品は生まれただろうか。おそらく、踊子が素っ裸で 私 に向かって手を振る名場面や「白い陶器に薄紅を刷いたような皮膚」の「不思議なくらい清潔」な駒子の姿も見なかったのだろう。少なくとも、外国人である私が川端文学に惹かれた理由には、この温泉場に見られる日本的な風景や生き生きとした人物描写があった。

川端の作品には日本語ならではの余韻を残すニュアンスの表現が多い。有名な『雪国』の「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなった。」という冒頭部分で、それを翻訳するのに大変だったというサイデンステッカー氏のお話を聞いたことがある。それだけではない。ほかに、「いい人ね」「清潔に微笑んでいた」「悲しいほど美しい声」「高い響きのまま夜の雪から木魂して来そう」等の表現は、韓国語に置き換えるこ

とはできるが、その風景や状況・感情まで読者に伝えることは難しい。言い換えれば、日本語だけの問題ではなく、川端文学の特色である叙情性は理解し難い大きな壁とも言える。日本に来て十年、今までは作品を理解するだけで精一杯だったが、今後は作品を理解するだけでなく、川端文学における言葉の魅力や奥深さを母国の読者に伝えることも川端を一生追求していく私の使命の一つだと思っている。

『雪国』における鏡のメタファー

康 林

なぜ島村は初めて駒子に出会った時、彼女に惹かれながら、別の芸者を世話してくれと言ったのか。その理由の一つとして『雪国』では「無論ここにも島村の夕景色の鏡はあつたであらう」と説明した。

「夕景色の鏡」は、島村が再度駒子に会うために、冬の温泉場に向かう汽車の中で体験した出来事である。時間的には島村が駒子と初めて出会った「新緑の登山季節」より半年以上も後のことである。それ故に赤塚正行は「『雪国』論」(『原景と写像 近代日本文学論』昭和三十二年一月原景と写像刊行会)で「この文章は実はおかしい」「一度目の雪国でのこの場面に」「一度目の雪国行の車内で」「発生した「夕景色の鏡」は「あり得ない」と述べ、さらに「川端は島村の「非現実的な

方」、実像をではなく虚像を見る島村の目を、

われわれに印象づけ「るために、こつした」描写上の矛盾を冒すまでに至つたのだと指摘した。

だがその個所の改稿事情や前後文の意味合いを合わせて考えてみると、その描写は決して川端のケアレスマスではなく、一種のレトリックと考えられる。つまり「夕景色の鏡」という一つの言葉には、二つの概念が含まれている。一つは島村が二度目の旅、夕暮れの汽車の中で実際に葉子の顔を写して見ていた「夕景色の鏡」であり、もう一つは過去の「踊りの研究」にしても、雪国にはじめて出かけた駒子に出会つた時にしても、ずっと島村の心の中に存在していた一枚の「鏡」、即ち島村が「鏡」を透して物事を観察する彼独特なものの方であり、考え方である。むしろ前者は後者の具象化であり、後者があるからこそ前者はそうして現像したのである。事実上「夕景色の鏡」という言葉は一つのメタファーとして作品の中で機能している。さらにこのメタファーは川端の言う「東洋的な」禅仏や老荘における鏡のメタファーと繋がり、「雪国」の虚無の世界を構成するキーポイントとなっている。

今私はこの問題について、『雪国』における鏡のメタファー」と題し、一つのをまとめようとしている。

文章の起源について

大坪 利彦

大正六年一月に急逝した茨木中学英語教師の葬儀を題材とした「師の柩を肩に」という文章がある。発表経緯は微妙で、石丸吾平主宰の雑誌『団欒』に掲載されたオリジナルが存在するらしいのだが、発見されていない。

川端康成にはこつしたオリジナルをめぐると興味深い出来事がある。その存在の噂については広く流布通底しているにもかかわらず、原典（オリジナル）は決して現れないという不可思議を生産する方法、作品系譜上のミッシング・リンクとも考えられる事跡は、あらゆる芸術的創造の源泉を探り当てている。芸術家は、処女作に向かつて成熟していくことの偽りなき真実。川端康成にとってのそれは、

つまり「湯ヶ島での思ひ出」（107枚）というオリジナルなのである。物語を生み出すということに関しては、その起源・淵源を、人生の危難や安寧、過渡、境界、不明、停滞などのあらゆる時期に振り返ること、再帰、回帰していくという行き方が、創作行為における健全な均衡を保ち、あるいは自己保身にも繋がるような生命の作用・機能なのではないだろうか。起源に回帰することによって、創造の再起を果たす反復運動と言ってもかまわないだろう。「湯ヶ島での思ひ出」は、川端文学における大きな謎であり、魅力なのである。川端自身にしかその存在確認をなし得た者は

かつてあり得ないというこの一点においても、既にして限らない魅力を産出している。芸術創造者にとっては、かけがえのないアドバンテージとなる。その原典の存在について遍く知られているという前提に立つた上で、しかし事実は絶対の不在を演出しているという不可思議が、決して侵犯されない価値として目の前にあり、利用するべきもつとも意味のあるときに、必ず期待された分だけの利益を生み出し続けてくれるという約束された黄金の卵なのである。卵はいつでも思うように孵ってくれる。

『川端文学への視界 18』を読んで

森本 平

山田吉郎「習作時代の川端康成」

この論においては、習作期の川端が、時代の中で何を吸収し、どのように試行し、いかにそれらが後の文学的達成の源泉となつていったかが検討されている。こつした論の場合、筆者の思いつきにとどまらぬ説得力を持たせるためには、十分な調査や検証が必要となるが、日記中の「修養誌」の調査の部分などで明白な通り、裏打ちとなる地道な努力が充分に成されている。いろいろ啓蒙してくれる論文であった。

問題点、というより今後の期待としては、

習作期の川端の姿を丸彫りするためには、更に多岐に渡る方面からスポットを当てねばなるまい。文中、指摘されながら深く追及されずに残っている問題もある。もっとも、筆者自身が「さらにまとめた形で分析する必要がある」、「取り上げるべき事柄はなお多し」と記しているので、次なる成果を讀者は待つていれば良いのであろう。

河野基樹「戦中の旅」

かねがね私は、常に時代や社会に目を配りつつ、その中から作品のありようを読み解いてゆく筆者の論には多く学ばせてもらってきた。それゆえにこそ、今回の論文には、多少の不满を感じずにはいらなかった。

筆者は、「写生」をキー・ワードに川端にとつての旅の意味をとらえ、筆者らしい緻密な分析にもとづくさまざまな指摘を重ねながら、「東海道五十三次」をフックとした、川端と岡本かの子との比較や関係の解明へと向かう、部分部分については大変興味深く読んだ。特に、川端とかの子との具体的な描写の比較などは、納得させられること大であった。ただ、一文を読み終えた時、私の読解力の不足ゆえか、全体を通しての印象が散漫に思えてしまった。最後に写生なり虚構意識の問題なりに引き戻す部分をつけるか、8の章は次に譲ってカットするかした方が、より印象がクリアになったのではなからうか。

東雲 かやの

後藤聡子「自意識の病い」

「片腕」という作品を「私」を軸に読み解いてゆく論はすでに多数あるが、後藤論は実体としての「私」ではなく関係としてのわたしに着眼し論じている点で、従来の論と一線を画している。殊に、「私」の知覚世界を「孤独」の外在化であるとした「投影的世界」には新しい展開がある。臨床の場で用いられる分析方法を作品読解に応用させる論は近年珍しくないが、川端作品においてはまだまだ開拓の余地があるように感じられた。

今回、意欲的な作品分析の果てに後藤氏が辿り着いた先は、川端を含む「近代作家たち」のわたしであったようだ。確かに、自意識と自己規定の間で引き起こされるパラドックスを、近代的自我の概念に支配された時代の作家の「自意識の病い」とした結語は、大変興味深い。しかし、繊細かつ秀逸な分析の着地点が「近代作家たち」という広大な場所に設けられたこと、「私」と作者川端が性急にイコールで結ばれたことに、些かの違和感を覚えたのも事実である。もしかするとこの辺りが「新しいアプローチ」の難しさなのかもしれない、などと考えさせられた。

鄭 香在「掌の小説『有難う』と

映画『有りがたうさん』

鄭氏「掌の小説『有難う』と映画『有りがたうさん』」には、先行研究をしつかりと踏まえた上で二作品を比較した丁寧な分析が見られた。

しかし、減「暗示性」、加「明示性」を、それぞれ文学、映画の特徴であるとするにはもう少しの手續が必要かもしれない。「有りがたうさん」における登場人物たちの多弁さや構築型ストーリーが小説的作法であるならば、文学（小説）「加 表現」という図式も成り立つことになるからだ。作品の持つ個別性と、方法が持つ一般性とを論じる際には注意を払わなければならないだろう。とは言え、キーワードの用い方は大変巧妙で、全体としてまとまりのある論文である。

省筆 が川端文体の特徴であることは指摘されて久しいが、映像との比較を通して開かれる新しい視界を感じることができた。

お知らせ 「夫人の探偵」について
森 晴雄

従来発表紙・誌が未詳であった、掌の小説「夫人の探偵」が「東京日日新聞」の昭和二年五月十日に発表されたことを確認しました。連載小説の三上於菟吉「炎の空」の休載に変わるものです。校正をすることができなかつたためか、夫人の夫である安藤さんを「和田氏」「濱田」と誌す一度の誤植があります。

掌の小説 私のベスト3

大坪利彦

- 1 日向 2 月 3 さざん花

若い頃詩の代わりに掌の小説を書いたと自解した通り初期作品には 祈り に通じる述志が感じられる。

張月環

- 1 有難う 2 冬近し 3 バッタと鈴虫

1 人物、風景の描写が美しい。人の心に温もりの作品である。

2 運命、夢、幻などを含み、川端らしい作品である。

3 視覚と聴覚の美がここに見事に描かれている。

小曾戸明子

- 1 手紙 2 かかさぎ 3 雪

山崎甲一

- 1 化粧 2 バッタと鈴虫 3 男と女と

荷車

岩田光子

- 1 神います 2 笑はぬ男 3 化粧

山田吉郎

- 1 雪 2 不死 3 水

学生の頃、掌の小説の文庫本を読んで最初に心惹かれたのが『雪』だった。『不死』とともに川端晩年の幻惑に充ちた掌の小説を愛読している。

高比良直美

- 1 有難う 2 胡頹子盗人 3 夏の靴

微妙な心理（人柄）を読み取る楽しさがあること。季節のなかで、日本の風土の美しさが読み取れること。だから、何度読んでも楽しいです。

森 晴雄

- 1 心中 2 雪 3 手紙

川端文学の核であり、到着点でもある掌の小説はいつまでも味わい深い作品群である。

河野基樹

- 1 骨拾い 2 日向 3 処女作の祟り

いずれも、作品の伝記的事実との関係から重要な作品であるように思われる。この所謂伝記的事実”と、フィクションとしてのこれらの三作の関わり、さらには、川端自身の虚構構成の見識、手法との関連は、興味深い。

平山三男

- 1 ざくろ 2 雪 3 めづらしい人

〔新刊紹介〕

大木勲著 『川端康成・太宰治』 船橋

で結ばれた奇縁の二大大作家

高比良直美

太宰治は療養のため昭和十年七月一日、船橋に転居してきて、翌年十月、パビナル中毒悪化のため、武蔵野病院に入院し、船橋を去った。川端康成は、同年一月から九月半ばまで、断続的に執筆のため三田浜楽園に滞在していた。けれど七月から八月にかけて川端病院に入院していた。つまり、八月末から九月半ばまでの二十日余りの時期が重なっているのだ。短いともいえるが、太宰が熱望した芥川賞の選に外れ、選考委員の一人だった川端を強く恨みに思っていた、そんな時期だから興味をそそる。川端と太宰が船橋で出会ったという記録はどこにもないが、ひょっとして、二人は町なかで擦れちがったりなどしたのではないが、そこに居ると知らずに同じ町の空気を吸っていたのだと、大木勲氏はその奇縁に引かれ、二人が目にしたであろう船橋で長年、市の仕事に携わってきた大木氏は、人一倍船橋に愛着を持ち、当時の船橋はどんな風であつただろうと、こだわり続けてきた。

太宰に関しては千葉にかつて研究会もあり、船橋桜桃忌が行われるなど関心が高かつたが、

川端と船橋に関しては、大して注目されていなかった。昭和四十年に「川端康成と船橋の今昔展」が、船橋市・市民文化ホール主催、川端文学研究会共催で行われた。この折に、平山三男氏を中心に研究会で初めて調査を行った。その結果は『川端康成と船橋 調査報告と年譜』（『川端文学への視界2』）にまとめられている。そこには、資料として当時船橋市広報部長だった大木勲氏の「川端康成 三田浜楽園を舞台に描く」（郷土文化史の周辺に）¹²が紹介されている。

大木氏の今回の著書は、川端と太宰が居た時期の船橋をよみがえらせ、二人に文学者が過ごした時代背景を知らせてくれる。調査中、奇縁は大木氏自身にも結ばれ、思いがけない発見に感きわまつた大木氏の顔があちこちに見える。楽しい経験だったことと思う。川端と太宰のことに限らず、今、調査しておいて良かったと思うような船橋の文化史のあれこれがかかれていて、次第にこちらに重きが移っている。写真資料も貴重だ。

なお、大木氏の著書に限らず、新聞などでも船橋ゆかりの文学を紹介する折に、砂糖碧子氏の『滝の音』を参考にする人が多く、これに基づいて昭和八年にも三田浜楽園に滞在していたように書かれている。これは間違いであることが、平山氏の論文（同前）に明らかだ。今回、出版の喜びに水を差すようだと気が引けたが、訂正をお願いした。

（平成十五年六月、京葉新報社、千五百円）

平山城児著

『川端康成 余白を埋める』

（平成十五年六月、研文出版、二千三百円＋税）

- 1 非凡閣版『現代語訳国文学全集』の事情
- 2 雑誌『大和』と荷風の「枇杷の花」
- 3 佐藤碧子「滝の音」と川端康成『全集』補巻二に見られる代作の問題
- 4 川端康成「歌劇学校」と母との関連
- 5 川端康成が「舞踊」に抱いていた執念
- 6 「歌劇学校」に関する先行論文をめぐって
- 7 川端康成作「椿」と葦原邦子の「忘れじの歌」
- 8 アルバイトで出遭った人々
- 9 ひとつの「山の音」
- 10 第二十九回国際ペンクラブ大会の楽屋裏
- 11 「細雪」と「山の音」
- 12 川端康成と上森子鐵

森晴雄著 『川端康成「掌の小説」

論 「雨傘」その他

（平成十五年五月、龍書房、二千四百円＋税）

「雨傘」 “夫婦のやうな気持”

「踊子旅風俗」 人生そのものの家出娘

「縛られた夫」 “ほんたうの母”

「靴磨き」 子供とパジャマ

「顔」 “巡礼のやうな心”

「婦人の探偵」 花々の誘い

「顕微鏡怪談」 江戸川乱歩に触れつつ

「三等待合室」 ロマンチックな印象

「藤の花と苺」 乳児の唇の幻

「眉から」 安らかさ

「靴と白菜」 花嫁の日の象徴

「眠り癖」 朝の挨拶

「喧嘩」 青い海の陽炎

* 「合掌」 自分の力

「屋根の上の貞操」 安らかな眠り

「万歳」 一生の夢

「神の骨」 赤子の心づくし

「死顔の出来事」 人間の魂

「霊柩車」 「偶然」と「滑稽」

「赤い喪服」 赤い伝染病

* 「わかめ」 女の幸福

「蛇」 夢と宝石

* 「手紙」(再) 岡本一平に触れつつ

「白馬」 “人生のさびしさ”と“長い黒布”

「竹の声桃の花」 魔の力

「髪は長く」 “所作”と“抽象画”

『掌の小説』 一覧

川端康成参考文献 平成15年度 1月～9月 森晴雄

1 単行本

- 森晴雄 『掌の小説』論 「雨傘」その他 龍書房 平成15・5
平山城児 川端康成 余白を埋める 研文出版 平成15・6
大木勲 川端康成・太宰治 船橋で結ばれた奇縁の二大作家 京葉新報社 平成15・6

2 紀要

- 岡田豊 川端康成『山の音』に関する一考察 作品内の 昭和二十五年 という年を起
点として 「駒沢国文」40 平成15・6
兪 載信 川端康成の『みづうみ』論 魔界を中心に
「論究」35 中央大学大学院生研究機関誌編集委員会 平成15・3
羽鳥徹哉 川端康成の「東京の人」 「成蹊国文」36 平成15・3
鄭 香在 新感覚派映画連盟・「狂つた一頁」と川端康成 連盟のシナリオ作家として
「成蹊国文」36 平成15・3
黒田創一 川端康成の「新晴」について 「成蹊国文」36 平成15・3
杉井和子 「夏の靴」(川端康成)における描写の意味
「人文学科論集」39 茨城大学人文学部紀要 平成15・3
羽鳥徹哉 浦上玉堂と川端康成 「琴を抱いて」「天授の子」「いつも話す人」、昭和二十九年の転
機 「成蹊大学文学部紀要」38 平成15・3
小林寛子 川端康成作品論 『抒情歌』『あなた』との愛
「日本文学」99 東京女子大学 平成15・3
康 林 川端康成と老荘思想 「空に動く灯」を手がかりに
中京大学「文学部紀要」38 平成15
掛野剛史 川端康成「浅草紅団」論 分裂と統一・プロレタリア文学を光源として
『都大論究』40号 平成15・6

3 雑誌

- 川俣従道 川端康成と心靈学 2 「花粉期」 平成15・1
森 晴雄 川端康成「夏の靴」「港」と「感化院」「雲」 平成15・1～3
森 晴雄 川端康成「男と女と荷車」「弱虫」と「お転婆」「雲」 4～7、9
森 晴雄 川端康成「弱き器」(掌の小説)論 堀辰雄「鼠」に触れつつ
「群系」16 平成15・10
森 晴雄 川端康成「静かな雨」(掌の小説)論 紙の灰の死 「群系」16 平成15・10

4 単行本所収論文

- 近藤裕子 「視覚の揺らぎ 川端康成の 目」
『臨床文学論 川端康成から吉本ばななまで』 彩流社 平成15・1
小澤萬記 「変奏の行方 4 切りとられた時間 川端康成『浅草紅団』」
北岡誠司・三野博司編『小説のナラトロジー 主題と変奏』
世界思想社 平成15・1
行吉邦輔 「川端康成『山の音』をめぐって」
『近代作家論』 中央大学出版部 平成15・2
井上ひさし 小森陽一編・著 『座談会 昭和文学史』第一巻
第5章 横光利一と川端康成 「新感覚派」の旗手(川端康成、保昌正夫)
集英社 平成15
羽鳥徹哉 川端康成『文芸時評』解説 講談社文芸文庫 平成15・9

須藤宏明 「『新思潮』大正十一（一九二二）年三月号の掲載作品の比較研究 川端康成、鈴木彦
次郎を中心に」 盛岡大学文学部 『文学部の多様な世界』
教育史料出版会 平成 15・3